

エゼキエル書22章30節「破れ口に立つ者」

1A エルサレムの破れ口 25-29

2A 主に食い下がる者たち 30

1B アブラハム

2B モーセ

3B パウロ

4B 主ご自身

3A 最前線に立つ者たち 30

1B ピネハス

2B ダビデ

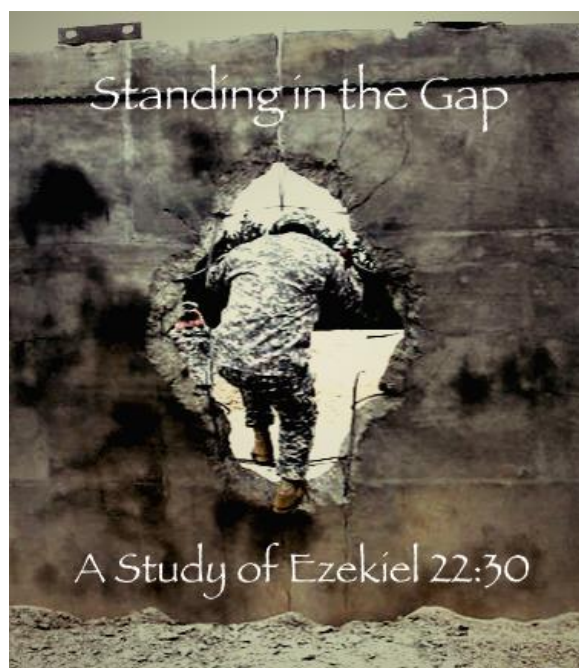
3B 三勇士

4B 主ご自身

本文

エゼキエル書 22 章 30 節を開いてください。私たちのエゼキエル書の聖書通読の学びは、21 章まで来ています。本日、午後に 22 章から 24 章まで読みます。今朝は、22 章 30 節に注目します。「**わたしがこの国を滅ぼさないように、わたしは、この国のために、わたしの前で石垣を築き、破れ口を修理する者を彼らの間に捜し求めたが、見つからなかった。**」

主がここで語られている、「破れ口の修理」について、私たちはこれから見ていきたいと思いません。破れ口とは、城壁が一部崩れている、穴が開いているところであります。私たちは、聖書を読んでいって「町」と訳されているところの多くが、「城」と訳すことのできるものであることを学んでいます。古代の都市、いや中世や近代に至るまで、外敵から守るために人々の住む町には必ず城壁がありました。そして、ここの門が開かれている時は門衛を付けて、町に属していない者たちは決して入れません。また門が夕に閉じられる時はどんなことがあっても、開けることはありません。それだけ危険だからです。ですから、破れ口ができるということは、外敵が攻めて来る入口になるということです。そして、敵が城を包囲している時に、城内に攻め入るのは破れ口からになります。ですから、破れ口が生じていれば、そこを急いで修理する必要があります。また、修理の暇など全くないような時には、その間に立って戦います。ですから、その時は、敵と味方が入り乱れて戦う戦闘の場所となります。私たち現代においては、例えば決壊した堤防の中で、懸命に復旧作業をしている人々や、壊れた原子炉建屋の周辺で放射能と戦いながら復旧している人々が、破れ口を修復している、あるいは破れ口に立っていると言えるでしょう。



1A エルサレムの破れ口 25-29

主は、「わたしがこの国を滅ぼさないように、わたしは、この国のために、わたしの前で石垣を築き、破れ口を修理する者を彼らの間に捜し求めたが、見つからなかった。」と言われます。これはどういうことか？ユダの国が、主の御心に違反することを行なっているのです。主はこれを滅ぼすと言われています。主はご自分の聖なる御名のために、御心から逸れたことを行なっているのであれば、それを潰すことによってご自分が主であることを示されます。しかし、滅ぼすこと自体を神の願っておられるのではありません。ここで、執り成す者、ご自分の前に来て、この民のため、この国のために願いを立てる者、仲裁する者を捜しておられたのです。民に代わって、主の前に出て来るものを捜しておられました。ところが誰も見つからなかったのです。

預言者たちは、ここに破れ口があるぞ、と語らなければいけません。つまり、「ここに罪がある、神に背いている。悔い改めよ。」と語らなければいけません。ところが、口当たりのよい約束を語るばかりです。破れ口を修理するどころか、上塗りしているだけになります。祭司たちは、律法を教えなければいけません。そして主が聖い方であること、また私たちが聖くならなければいけないことを語らなければいけません。ところが、律法、神の言葉を教えていなかった。汚れと聖さの違いを教えませんでした。それどころか、安息日を聖別すること、主をあがめることさえ教えていませんでした。そして、君主や首長がいました。彼らは民の富を食いつぶし、寡の数を増やし、人々を殺して利得を求めていました。そして一般の民も破れ口を修理しませんでした。虐げを行ない、貧しい人々を顧みないとあります。だれかが、その破れ口の前に立たないといけないのですが、誰も立たない。だれも修理に行かない。それで敵がどんどんそこから押し寄せてきて、潰れていってしまうということでもあります。

私たちの習性として、それは罪の性質ですが、「責任を取りたがらない」というものがあります。目の前に、はっきりと破れ口があるのが見えます。「教会において、また自分の身の回りにおいてここが主に求められていることだ」というものが見えます。それはしばしば、聖霊が自分の示してくださっているものです。ところが、そこに触れるものなら、自分が責任を負わなければいけません。けれども、自分がそれを負えば、破れ口に立つことになり、厄介なことに関わっていくであろうことも見えています。だから、見て見ぬふりをします。このような生活、破れ口を修理しない生活は、自己保身の生活となります。体裁は保てるでしょう、けれども実質が無くなっていきます。神の愛がなくなっていきます。救いの喜びが薄れていきます。生きていとされているが、実は死んでいるというサルデスの教会に対する、イエス様の言葉のようになってしまいます。一人一人が、勇気をもって聖霊に導かれるという従順が必要です。

2A 主に食い下がる者たち 30

破れ口に立つ、という者は、神の前に出て、他の人々のために執り成す者たちであります。人々が罪の中に生きている。また、心がまだ開かれておらず、主から命じられていることを行なってい

ない。あるいは、信仰から離れてしまったという人々もいるでしょう。心の中には、いつのまにか不信仰が芽生え、その罪によって神から心が徐々に離れているかもしれません。このように、あまりにも大きな課題に対して、私たちは、「これをすればよいではないか。あれを行えば、いや、行なってはいけなかったのではないか。」など、いろいろ言います。けれども、だんだんわかって来るのは、「祈る」だけ、ということなのです。自分がその人のために代わりに何かすることはできません。神ご自身が聖霊によってその人の良心に働きかけ、ご本人が罪の自覚が与えられ、悔い改めて主への信頼を取り戻すことしかできないのです。これが、執り成すことであります。

しかし、執り成すことは簡単ではありません。主の前に出て行くという、しんどい作業があります。もっとはっきり言うなら、「主の前に食い下がる」と言って良いでしょう。「エペソ 6:18 すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。」主が、そのような人を望まれているのです。私たちにとっては状況がどんどん悪くなるように見えるのですが、実は主がそのようにさせておられるのです。そして、私たちが心砕かれて、主の前に出て、祈り進むことを願っておられるのです。主は、私たち無しでご自分の働きをすることはできますが、私たちに関わらせて、事を行われたいと願われています。その関わりを生むために、私たちが主の前に食い下がるように導いておられるのです。

1B アブラハム

その第一人者に、アブラハムがいます。彼は、甥のロトとその家族の住むソドムの町を主が間もなく滅ぼされることを知りました。それで、食い下がったのです。「創世 18:23-25 あなたはほんとうに、正しい者を、悪い者といっしょに滅ぼし尽くされるのですか。もしや、その町の中に五十人の正しい者がいるかもしれません。ほんとうに滅ぼしてしまわれるのですか。その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにはならないのですか。正しい者を悪い者といっしょに殺し、そのため、正しい者と悪い者とが同じようになるというようなことを、あなたがなさるはずがありません。とてもありえないことです。全世界をさばくお方は、公義を行なうべきではありませんか。」そして主は、「18:26 もしソドムで、わたしが五十人の正しい者を町の中に見つけたら、その人たちのために、その町全部を赦そう。」と言われました。そこでアブラハムは執り成しを止めませんでした。五十人ではなくて四十五人かもしれない、いや、四十人かもしれない、三十人かもしれない、もしかしたら二十人も、そしてついに、「十人の正しい人かもしれません。」と言いました。すると主は、「滅ぼすまい。その十人のために。」と言われました。残念なことに、正しい人は十人もいませんでしたが、しかし主はロトとその娘を救い出されました。そしてこう書いてあります。「19:29 こうして、神が低地の町々を滅ぼされたとき、神はアブラハムを覚えておられた。それで、ロトが住んでいた町々を滅ぼされたとき、神はロトをその破壊の中からのがれさせた。」神はロトではなく、アブラハムを覚えて、それでロトをその破壊から逃れさせたのです。

2B モーセ

そして私たちには、執り成しの手本としてモーセがいます。イスラエルの民が荒野で金の子牛を造り、その回りで性的に乱れました。それを主がご覧になって、怒られ、モーセに言われました。「出エジプト 32:9-10 わたしはこの民を見た。これは、実にうなじのこわい民だ。今はただ、わたしのするままにせよ。わたしの怒りが彼らに向かって燃え上がって、わたしが彼らを絶ち滅ぼすためだ。しかし、わたしはあなたを大いなる国民としよう。」モーセは食い下がりました。「あなたが、この民を連れ出されたのですよ。あなたが、あなたのしもべ、アブラハム、イサク、ヤコブに、彼らを空の星のように、海の砂のように増やして、約束された土地を子孫にすべてお与えになると仰せられたのです。」すると、主は思い直されました。主が頑固おやじのように、聞き分けがなく、モーセが宥めたというものではありません。主ご自身が彼らを憐れみたいと願われているけれども、その罪を裁かなければいけないという葛藤なのです。その葛藤の中に、つまり破れ口の中にモーセを関わらせたいと願われて、彼が食い下がる祈りを捧げるように導かれたのです。

しかし、彼らの中にまだ乱れている者たちがいます。それでさらに三千人が倒れました。モーセはついに、彼らのためにこんな祈りを捧げます。「32:32 今、もし、彼らの罪をお赦しくださるものなら…。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」神は、ご自分が救う者たち、ご自分の国の中に入れる者たちを、ご自分の書物の中でその名を書き記しておられます。イエス様は、悪霊を出て行くこともすばらしいが、天にあなたの名が書き記されていることをもっと喜びなさいと言われました。救いを保障するものです。ところが、もし彼らの罪をお赦しくださるものであれば、どうか私の名を消し去ってくださいとまで祈ったのです。

3B パウロ

新約においても、同じように祈った人がいますね、パウロです。「ローマ 9:1-3 私はキリストにあつて真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかししています。私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。」彼は無理なことを祈りました。8章で、キリストにある神の愛から、自分たちを引き離すものは何もない、と断言したばかりなのです。けれども、それでもユダヤ人にこそ神の救いが用意されているのに、それなのに彼らが福音に敵対しているという事実に対して、絶えず心に痛みがありました。それで、何とかして彼らが救われてほしいと願ったのです。しかし、彼らが頑なにされていることも、神の主権があります。それも重々承知の上に、それでも彼は彼らの救いを祈ったのです。そしてこのことも、神のご計画でした。その呻きこそが、神ご自身のご自分の愛する、選びの民に対する呻きであり、その呻きをパウロ自身の心に入れたのです。

この呻きの祈りは、執り成しに欠かせません。神はご聖霊によって、うめきの祈りを助けてくださ

います。「ローマ 8:26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いやうもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。」

4B 主ご自身

しかしパウロも、またモーセも、彼らの救いのために自分が呪われた者、滅ぶ者としてほしいという祈りは聞かれませんでした。神は個々人の救いを交換条件にして取り去ることはなさいませんでした。しかし、神はそのことをご自分の御子イエス様の上で行われたのです。イエス様はゲッセマネの園で祈られました。「ルカ 22:42 父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」この杯とは、神の怒りの杯です。人々の不従順に対する神の怒りの杯です。しかし、それをイエス様はご自分の父から受けられる、何も罪も悪いことも犯していないのに、ただ私たちが罪を犯したからという理由で身代わりに飲まれるのです。この祈りが、血が滴るほどであったことをルカは書き記しています。「22:44 イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」そして主は、その神の怒りを受ける十字架の上で、私たちの罪が赦されるように執り成しをしておられたのです。「23:34 父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」

私たちは、主の執り成しがあって今、生きています。今も、父なる神の右の座におられて執り成しをくださっています。私たちのために、父なる神の前に食い下がって祈っておられます。かつて、イエス様を三回、否んだペテロですが、それはイエス様がペテロの信仰がサタンによってふるいにかげられるのを知って、父なる神に願って、それで信仰が無くならないようにされたからです。ですから、私たちが今、信仰があること自体が、イエス様の執り成しによるものです。こうやって、イエス様ご自身が執り成しをしておられ、そして私たちもキリストにあって、御霊の助けで一歩前に出るのです。

3A 最前線に立つ者たち 30

このように私たちは、人々のために動く以上に、主の前に食い下がるように願う、その執り成しの務めが任されています。そして、先に話しましたが、私たちは破れ口に立たないといけません。敵に打ち勝つために、誰もやっていないことを一歩進んで出て行く勇気が必要です。

1B ピネハス

その破れ口に立った人で際立っているのは、祭司ピネハスです。イスラエルが荒野の旅をしている時に、モアブの草原で宿営している時に、バラムの助言でそこにモアブの娘たちがやってきました。イスラエルの男たちは彼女たちを自分の天幕に入れて、みだらなことをして、そしてモアブの偶像を拝みました。それで主ご自身の神罰が下ったのです。皆が心を痛めて悲しんでいるところに、公然とミデヤン人の女とを連れて天幕に入るイスラエル人の男がいました。その時に、祭司ア

ロンの孫、ピネハスが手に槍をもって、その奥の部屋に入って、その男と女を、腹を刺しとおして殺しました。それで神罰がやみました。(民数記 25 章) 罪に対する悲しみを、神と共有したのです。

2B ダビデ

そしてダビデがいます。あのゴリヤテとの戦いです。ゴリヤテが主の御名を罵っていたのですが、イスラエルの陣営はみな、意気消沈し、非常に恐れていました。しかし、少年ダビデがイスラエルの神の名をゴリヤテがなぶっているのを聞きました。それはあってはならぬこと、そこでダビデはその破れ口に立ちました。人々が恐れているところ、まさにそこに、イスラエルの神の御名によって立ち向かいました。「1サムエル 17:45 ダビデはペリシテ人に言った。「おまえは、剣と、槍と、投げ槍を持って、私に向かって来るが、私は、おまえがなぶったイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かうのだ。」主の御名があがめられていないところで、義憤、憤りを抱いたのです。使徒パウロもアテネで偶像を見て憤りを感じて、それで伝道しましたね。主から与えられた情熱です。

3B 三勇士

そして、あまり知られていませんが、ダビデの部下の三勇士は私にとって、憧れです。その一人シエマという人がいます。「2サムエル 23:11-12 彼の次はハラル人アゲの子シャマ。ペリシテ人が隊をなして集まったとき、そこにはレンズ豆の密生した一つの畑があり、民はペリシテ人の前から逃げたが、彼はその畑の真中に踏みとどまって、これを救い、ペリシテ人を打ち殺した。こうして、主は大勝利をもたらされた。」皆が退散している時です、彼だけは留まっていた。背中を敵に見せませんでした。そして畑の真ん中で踏みとどまったのです。そう、踏みとどまる勇気です。主の約束をしっかり握りしめ、踏みとどまって戦う力があります。

4B 主ご自身

そして何よりも、私たちの主イエス・キリストご自身が破れ口に立つ、そのものになってくださいました。私たちは罪を犯しました。それで、罪が仕切りとなり神から引き離されてしまいました。イエスは神ご自身であるにも関わらず、人となられて、私たちの間に住まわれました。これ自体が、破れ口を修理しておられる行為です。人と神が引き離されているところに、その間に立ち、人が神をそのまま知り、見ることができるようにしてくださいました。その言葉や業において、力ある働きをイエス様はされました。イエス様は、憐れみにおいても破れ口を修理しておられました。人が触れなかつたらい病人に触れられました。私たちも、この方の力と憐れみによって、神の国の中に霊的にいることができるのです。

私たちはこの方を主と仰いでいます。ですから、誰もがしていないこと、他の人々が意図的に、無意識のうちに無視している破れ口に、必ず導かれます。